平和の大切さ

～戦争体験を聞く～

戦争を体験された方にお話を伺いました。紙面の都合上、お話のすべてをご紹介することはできませんが、多くの貴重な話を聞き、改めて命の尊さ、平和の大切さ、ありがたさを実感しました。
（担当／新井紀子、吉川美佳、平塚嘉代子、飯島紀）

渡井多津子さん

・昭和３年生まれ（95歳）
・終戦を迎えた場所　富士見市諏訪

　私は折戸の農家の生まれで95歳の今でも畑仕事をしています。

　小学６年の頃、戦争で修学旅行は今年が最後になるかもしれないと卒業した人も含めてお伊勢参りに行きました。翌年には戦争が始まり、勤労奉仕で兵隊に行っている家へ陸稲の草むしりに行きました。当時は何でも配給でマッチ棒さえ配給です。忘れられないのは、お菓子の配給で上福岡のお菓子屋さんへ、すあまを買いに行きました。家族で小さなすあまを切り分けて食べたことは忘れられません。

　高等科の頃、朝礼で鶴瀬小学校の校庭から空を見上げると偵察機が、やかん位の大きさに見えてキラキラ光っていました。その時は避難することはなかったです。鶴瀬に爆弾が落ちた時は防空壕の中にいたのですが、落ちた瞬間は、ドスーンドスンと体が飛び上がるような衝撃で恐ろしかったです。勤労奉仕で最初に爆弾が落ちた穴をもっこで埋めにも行きました。

　私の兄は昭和17年に出征しました。兵隊に行っている家の多くは陰膳をして、無事を祈ったものです。兄の子は、まだハイハイの赤ちゃんで、祖母におぶわれ毎日、神社へ父の無事を祈りにお参りしました。歩けるようになると家の裏のお稲荷様で一人でお祈りするようにまでなっていました。

　戦後、兄と同じ隊の人が戦地から帰ってきて、兄が見つからないと言われ、家族で大泣きしました。近所の人が戦争から帰ってくるたびにうれしくては泣き、兄はどうして帰ってこないのかと悲しくなり泣きました。兄は中国からハルマヘラ島へ向かう輸送船が次々と沈没していく中、たった２艘だけ島に辿り着いた船に乗船していたのです。島で終戦を迎え、昭和21年になって、やっと帰ってきました。もう、その時は家中みんなで泣きました。

柳川　博さん

・昭和８年生まれ（89歳）
・終戦を迎えた場所　川越市古谷

私は荒川と入間川が流れる川越の古谷出身です。小学５年の頃は空襲が激しくて、帰る途中に艦載機から狙われました。艦載機は千葉の沖合からやってきて低空を飛んで撃ってくるんです。低学年の子たちは怖くて震えて足がすくんじゃって歩けず一歩も前へ進めなくなってしまいます。その子たちを引きずるようにして引っ張り、命懸けで川の橋の下に逃げこみました。

　橋の下に隠れている時、目の前の畑で手ぬぐいを被ったおばさんの前後を艦載機が銃弾で撃ってくるのを見ました。頭に被った白いてぬぐいが光ってみつかったんだと思います。もう、生きた心地がしませんでした。東京大空襲の時も家から東京が真っ赤に燃える光景が今でも忘れられません。

　学校へは白米を弁当に入れると怒られ、おかずを入れていくと先生に取られ、先生も食べる物がないから大豆を炒ったのを弁当箱に詰めてポリポリ食べていました。魚釣りやいなご捕りをしても先生に没収されました。勤労奉仕で、あまりにもお腹がすくとこっそり、畑のニンジンやごぼうの泥を軽くはらっただけで食べたりもしました。

　ある時、Ｂ29が墜落したので砂新田の方まで友だちと走って見に行きました。次の日学校で昨日見に行った奴は前へ出ろと言われ、先生に往復ビンタをくらい、Ｂ29の滑走路だといって頭を刈られました。先生は上官、校長先生は天皇陛下と思えといわれた時代です。

　親戚のおじさんはフィリピンのマニラで戦死しました。兵隊から帰ってきた人の話によるとおじさんは一本気の人だから戦争に負けて薬を飲んで自死したと聞かされました。帰ってくるのを楽しみにしていたおばさんが、かわいそうでかわいそうで。

　終戦の年に家に電気がきました。電力会社に電信柱用に家の木を５本寄付していたので、家にはお礼にもらったラジオがあり、玉音放送を聞きました。戦争が終わり、空襲がなくなるかと思うとほっとしました。

　二度とあんな思いはしたくないし、子どもたちにもさせたくないです。戦争だけはダメだね。

谷合英雄さん

・昭和８年生まれ（90歳）
・終戦を迎えた場所　川越市南古谷

　戦争の頃は小学生で小学校は今の南古谷の音大付近にあり、周りは田んぼでした。

　学校へは１年から６年まで並んで行っていたと思います。朝、空襲警報が発令されると学校が休みになることもありました。勉強よりもじゃがいも堀りや草刈りの勤労奉仕が多かったです。学校へは弁当を持って行きましたが、昼になると家へ帰る子もいました。当時は食糧難だったから、多分、お弁当を持ってこられない子やお昼抜きの子もいたのだと思います。家では麦飯でしたが、麦は炊くと軽くて上に上がってくるので麦は母が食べて、子どもの私には下の方の白いご飯を食べさせてくれました。

　ある日、Ｂ29が５機編隊で飛んできて１機だけ遅れていました。その１機が東松山の方まで行ってＵターンして戻ってきたようで南古谷の上空を川越線に沿うように橋に当たるくらいの低空で飛んできました。もう生きた心地がしなかったです。寺尾の方で墜落したというので友だちと走って古市場の養老橋の上まで行くとトラックが止まっているのを見ました。そこで目隠しをされた状態の赤い髪の毛の花柄のシャツに半ズボンをはいている身体の大きな３人の捕虜がいました。アメリカ兵を見たのは、それが初めてでびっくりしました。近くに来たらダメだと軍人さんに怒られました。

　私より10歳上の兄は兵隊に行きました。終戦になって、もう帰ってこなくて、もうダメだろうと家族はあきらめていました。そんなある日、川越線の貨物が南古谷の駅に止まったのを見て、私は、あの貨物に兄が乗っていると思ったんです。虫の知らせというのでしょうか。そしたら、本当に乗っていたんです。駅の近くに住んでいる親戚が兄が帰ってきたよと家まで教えにきてくれました。家族みんなで喜びました。昭和22年のことです。兄に終戦の後、どうしていたのかと話を聞くと、捕虜になり農家の手伝いをしていたそうです。上官は大学を出ていても農家の仕事をできないから気に入られず、兄のような農家の出は農作業ができるのでとても気に入られ、毎晩のようにご馳走をふるまわれていたそうです。だから、帰ってきた時は少し太っていてびっくりしました。